

書簡からみた『コントロール・サント＝ブーヴ』執筆の軌跡

成 沢 広 幸

1954年、当時プルーストの姪の家に保管されていた資料を調査していたベルナルド・ド・ファロワは、1908年から翌年にかけて書かれたと推定される草稿類から『コントロール・サント＝ブーヴ』と題したプルーストの「未刊作品」を刊行した¹⁾。一方、プルースト生誕百年の1971年、ピエール・クララックはプレイヤード叢書から、同様の題名を持つ「未刊作品」の刊行を行ったが²⁾、これら二種類の版は単に刊行年代が相違するにとどまらず、その構成・内容ともに大幅に異なったものとなっている。というのも、両者の版の相違はそのまま、当時のプルーストと『失われた時を求めて』との関係についての両者の基本認識の相違を反映しているからである。『コントロール・サント＝ブーヴ』を構成すべき断章群の選択の基準は、この時期のプルーストの仕事が直接『失われた時を求めて』へと発展したのかどうかという点であり、ファロワは肯定、クララックは否定の立場から、それぞれのエディションを編んだのである³⁾。そして、二種類の異なる版の存在は、何を以て『コントロール・サント＝ブーヴ』と呼ぶのかという、コーパスに関する最も基本的な認識の一致さえ得られてはいないことも当然、意味している。

ところで、1962年、パリ国立図書館にプルースト関係の大量の資料が入って以来の草稿類の研究によって、1908年から翌年にかけてのプルーストの創造活動が『失われた時を求めて』の成立に深く関わっていることが、次第に明らかになってきた⁴⁾。つまり、基本的には、刊行年代の古いファロワ版の認識の方が広く承認されるようになったのだが、この版は断章間のモンタージュが見られるなど、草稿に忠実とは言い難いので、断章そのものについては、今やその基

本的認識が否定されたかに見えるクララック版の方が、批評版の体裁をとっているため、高い信頼性を持つという交錯した結果となっている。要するに、現行の二種類の版は、そのいずれもが致命的な弱点をかかえているのである。

ところで、本論において考察するのは、1908年から翌年にかけてのブルーストの創作態度がどのように変化していったか、すなわち彼がいかにして自分の創造行為に形式を与えてひとつの作品と化す営為をつづけていたかであり、当時のブルーストが実際に書いていた草稿類の具体的な内容、つまり今日その一部が二種類のエディションに収められている、そうした内容についてはではない。それを問題とするならば、まず『コントロール・サント＝ブーヴ』のコーパス確定が要請されるが、そのためには少なくとも、パリ国立図書館のブルースト資料の内、ある草稿集⁵⁾と、当時のブルーストの「航海日誌」⁶⁾とも呼ばれる一冊のメモ帳⁷⁾、そして『失われた時を求めて』の62冊の「下書カイエ」⁸⁾の内、当時書かれたと推定される何冊かのカイエ⁹⁾のそれぞれについて調査する一方で、それらの記述と、書簡に述べられた計画・意図との対応関係を探り、年代順に草稿の内容変化を調べる作業が必要であろう。だが本論で行うのは、そうした非常に錯綜を極め、膨大となるであろう論究、コーパスに関する考察ではなくて、書簡を通して明示されたブルーストの意図がどのように変化していったかについての概観である。従って「作品」としての『コントロール・サント＝ブーヴ』の名にはこだわらない。換言すれば当時のブルーストの意識を広義に理解するという試み、又、余りにも目的論的であるとの批難を覚悟の上で言えば、「作品」としてではなく、「過程」として当時のブルーストの仕事をとらえようという試みである。すなわち、1908年から翌年にかけてのブルーストにおける創造行為の焦点化の努力を書簡に探ろうとする試みである。

過程としての『コントロール・サント＝ブーヴ』を理解するという趣旨におけるブルーストの最初の発言は1908年の2月であると思われる¹⁰⁾。2月2日付のストロース夫人宛書簡で「かなり長い仕事にとりかかりたいと思います」¹¹⁾と述べ、又、4月21日にもルイ・ダルビュフラに宛てて「非常に重要な仕事を始めようと思う」¹²⁾と書き送っている。

ところでブルーストは1908年の初め、その年の1月に発覚したある詐欺事件を主題とした一連のパスティッシュを発表しているが¹³⁾、これらの書簡で述べ

られた「長い仕事」とか「重要な仕事」とかはパスティッシュではない。というのも2月にアンナ・ド・ノアイユに宛てて、パスティッシュは容易で平凡な練習にすぎないと言っているからである¹⁴。

とすれば、当時プルーストの考えていた「仕事」とは一体どのようなものだったか、それは5月初旬のルイ・ダルビュフラ宛書簡に明示されている。

というも、僕が今とりかかっているのは、貴族研究・パリの小説・サント＝ブーヴとフローベールとに関する試論・女性論・男性論（刊行困難）・ステンドグラス研究・墓石研究・小説研究だからです¹⁵。

こうした多彩な計画は果たして実現されたのだろうか。それについては同年夏、カブールにおいて書き始められたメモ帳（前述の「航海日誌」。以下1908年の手帳と呼ぶ。）の中に興味深い記述がある¹⁶。それは小説のすでに書き終えた部分の要約であるが、7月頃に書かれたと推定されるその要約と、5月の諸計画とは完全な対応関係には遠いが、少なくとも5月の計画の一部が7月には実現されていたと思われる。実際、5月に種々の計画にとりかかりつつあったプルーストは、試論や研究よりも小説を書こうと思いはじめていたことが、同月中旬のロベール・ドレフュス宛書簡で明らかである。

けれどもその間に、僕の計画がはっきりとしてきている。それはむしろ中篇小説になるだろう¹⁷。

ところが、『1908年の手帳』に要約されていた小説はそれ以上進まず、小説以外に創造の表現形式を求めようとしたことがこれから取り上げる書簡により明らかであるが、この放棄された小説が翌年にはプルーストにとって重要な素材となる¹⁸。夏に小説を放棄した後、プルーストは表現形式の選択に窮してしまう。

怠惰、懐疑、無能が芸術形式の選択を不可能にしている。小説を書くべきか、哲学研究をすべきか。私は小説家なのだろうか¹⁹。

年末に至り、なおも形式について迷いながらプルーストは、ほとんど同じ内容の書簡をジョルジュ・ド・ロリスとノアイユ夫人に送り、助言を求めている。

助言を求めてもいいだろうか。何かサント＝ブーヴについて書こうと思う。いわば二種類の論文、雑誌論文が僕の頭の中に形づくられている。ひとつは古典的形式の論文で、出来は及ばないがテヌ流の試論。もうひとつはある朝の物語で始まるだろう。ママが僕のベットのそばにやってきて、僕はサント＝ブーヴについて書きたいと思っている論文のことを物語るだろう。そしてママにその論文のことをもっと詳しく語るだろう。どちらの方がよいと思われませんか²⁹。

このように、表現形式は未決定ながら、表現内容については、同じく12月中旬のロリス宛書簡にも見られるように（「僕の頭の中に書かれているこのサント＝ブーヴ」²¹）、明確に理解されている。又、この頃、すなわち1908年の12月に入った頃からサント＝ブーヴの著作の読書を本格的に行うようになるが²²、実際には、年末のロリス宛書簡（「まだ仕事を始めていないが、早くも僕を読んだサント＝ブーヴを忘れてしまった」²³）や1909年1月中旬の、同じくロリス宛書簡（「まだ『サント＝ブーヴ』を始めていないし、できるかどうか危ぶんでいる」²⁴）に見られるように、1909年に入っても、執筆は行われていない。

そしてサント＝ブーヴについての一応の読書が終了し、今や書き出すか、それとも忘れてしまうかという選択を迫られていることを示すのが、1909年3月初旬のロリス宛書簡である。

いつか刊行される可能性が一番高いのはサント＝ブーヴです。（…）というのも、僕の頭の中で一杯になっているこのトランクのせいで窮屈な思いをしていて、出発するか荷を解くか決めなければならないからです²⁵。

ところで、サント＝ブーヴにかかりきりとなっていたこの時期、5月23日付のロリス宛書簡において、突然、「ゲルマント」という名が出現する²⁶。その名の家系が完全に絶えているかどうか、そしてその名を作中に使用できるかどうかを尋ねているのだが、このことは当時プルーストがサント＝ブーヴ批判

の計画の他に、「ゲルマント」の名の現れる作品の構想を持っていたことを意味するのだろうか。だが、以後の書簡で見る限り、そうは思われない。

というのも6月下旬にロリスに宛てて「ジョルジュ、『サント＝ブーヴ』を書き始めて、非常に疲れている²⁷」と書き送り、又、7月2日頃同じくロリスに「明日から再び『サント＝ブーヴ』にとりかかろうと思う²⁸」と述べていることから明らかなように、少なくとも6月下旬にはようやくサント＝ブーヴについて書き始めたのだが、実はこの『サント＝ブーヴ』は前年末に表明された物語形式か評論形式かというためらいをのりこえ、小説として構想されていたのであり（7月中旬のレイナルド・アーン宛書簡に「老サント＝ブーヴに関する僕の小説²⁹」という表現がある。）、その内容は後述のアルフレッド・ヴァレット宛書簡を手掛りにして推測すると、1908年夏に放棄された小説草稿³⁰を含む、つまり1908年5月のダルビュフラ宛書簡で述べられた多彩な計画の少なくとも一部の実現を含む、総合的な小説として書かれつつあったと思われるからである。

さて、6月下旬に書き始められたこの小説『サント＝ブーヴ』は、8月中旬になっても書き終わられていないことが、同時期のロリス宛書簡により明らかであるが、この書簡で注目すべきは、すでに出版社を探そうとしていることである。

ジョルジュ、《熱》があるので余り長く君に書けない。『サント＝ブーヴ』は書き終えたのかというお尋ねですが、まあそうせかささないで下さい。できるときにまたとりかかりますよ。(…)困ったことにどこでそれを出版できるやらからないのです³¹。

このことは、すでに小説が完成しつつあったか、あるいは完成の目途がついていたことを意味するのではないだろうか。事実、この書簡のわずか後に書かれたと思われる『メルキュール・ド・フランス』編集長アルフレッド・ヴァレット宛書簡において、プルーストは次のように述べている。

私はある本を書き終えようとしています、その本は『コントル・サント＝ブーヴ、ある朝の回想』という仮題にも拘らず真の小説であり、いくつかの部分は非常

にみだらな小説です。主要登場人物の一人は同性愛者です。(…)サント＝ブーヴの名は偶然に由来する訳ではありません。この書物はサント＝ブーヴと美学とに関する長い会話で終わります。(…)この本を読み終えようとするとき、次のことに気付かれるでしょう。つまり、この小説凡てが、その最終部分で述べられる芸術原理の作品化に他ならないということを³²。

更にプルーストはつづけて、その書物の刊行が1910年の1月か2月に行われることを望む旨を述べているので、この8月中旬から四・五ヶ月で決定稿に達するとの目途がついていたことがわかる。又、自作について「長い年月をへだてて、出来事が互いに反映し合う書物です³³」と言い、繰り返しになるが、自作を小説部分とサント＝ブーヴや美学についての長いお喋りとに二分している。そして冒頭の百ページをコピーして送りたいが、その部分は非常に「清らか」であるとも、言いそえている。

このように、プルーストが書き終えようとしている作品は小説であって、その最終部分で述べられる美学が残りの小説部分に具体化されており、多くの出来事が互いに対応し、主要登場人物の一人は同性愛者ではあるが、少なくとも冒頭の百ページは「清らか」である、とこの「作品」の特徴を挙げて行くにつれて、それらが凡て『失われた時を求めて』に共通することに気付かない訳にはいかない。すなわち、『失われた時を求めて』は、その最終部分のゲルマント大公妃邸のマチネで受けた芸術の啓示を実行に移して、主人公が自分の生涯を素材として芸術作品を創造する過程を描く小説であり、又、例えばゲルマント家とスワン家という全く異質の方向がやがてはひとつに結びつくという対応関係が存在し、シャルリュスという主要登場人物の一人は同性愛者であり、更に序章の「コンプレー」は、少なくとも、「みだら」ではない、等々。

更に言えば、『1908年の手帳』に要約された小説を書きついでれば、上で述べられた小説と類似のものになったのではないだろうか。とすれば何故プルーストは、サント＝ブーヴに関する長い迂回路を辿らねばならなかったのか。確かに1908年末の意図としては、それまでの諸計画とは無関係に、サント＝ブーヴ論を書きたいと望んだのかも知れないが、その場合でも評論形式と物語形式の両方でサント＝ブーヴ批判を、本格的にはないにせよ草稿の形で書き進める内、以前の草稿類の種々の人物や状況が新たな草稿の中で増殖し、なしく

ずしにサント＝ブーヴ批判が変質して、終にすでに書簡で見たような作品となったのではないのだろうか。換言すれば、プルーストはサント＝ブーヴ批判を中心として自分の作品を書こうとしたことにより、自分の創造行為に、『失われた時を求めて』につながる形式を与える契機を知らず知らずの内につくりだしたのではないかと思われるのである。

さて、プルーストは『メルキュール・ド・フランス』に作品刊行を拒否されたので（「ヴァレットは『サント＝ブーヴ』を拒絶している³⁰」）、ガストン・カルメットを介して『フィガロ』に作品を掲載させようとするが、このことは、8月中旬のストロース夫人宛と、8月末のロペール・ドレフュス宛の二通の書簡によって知ることができる。

多分、『フィガロ』に連載されるでしょうが、ほんの一部分だけです。というのも、余りにも難点があり、又、余りにも長いので、全部を載せられないからです³⁵。

僕が当地で会ったカルメットは、非常に親切かつ熱心に、僕が今書いている最中の小説を『フィガロ』に連載するように言ってくれた³⁵。

更に後者の書簡で注目すべきは「その一方で、僕はポーニエに、すでに書いた評論のことを話してしまった³⁷」という文言である。と言うのも、ここからわかる評論形式でのサント＝ブーヴ批判の存在は、プルーストはサント＝ブーヴ批判を評論と物語の二つの形式で書きつつあったが、物語形式のサント＝ブーヴ批判を書き進める内、次第に小説的要素が入り込み、サント＝ブーヴ批判として書き始められたものが徐々に『失われた時を求めて』の原型となっていたという仮説の支えのひとつになると思われるからである。

このように書き進められて行った作品の、最初の二百ページをレイナルド・アーンに読んでやり、その反応に勇気づけられたことが、11月下旬のロリス宛書簡³⁸からわかるが、この最初の二百ページはすでに『失われた時を求めて』の序章「コンプレー」と見なされている³⁹。この「作品」は『失われた時を求めて』へと脱皮しつつあったのである。それを物語るかのように、10月初旬のロリス宛書簡⁴⁰を最後として、プルーストが現に書きつつある作品の題名に關してサント＝ブーヴの名を用いることはなくなる。作品の主題としてのサント

=ブーヴの名は1908年末にあらわれ、1909年10月に消えたのであるが、その間の事情は今迄、書簡を通して考察してきただけでも、決して単純なものではないことがわかる。

すなわち、サント=ブーヴの名は単にサント=ブーヴ批判のために使用されただけではなく、結果的に見れば、自分の創造行為を将来の『失われた時を求めて』につながるような形式において表現するための、いわば起爆剤として作用したと考えられるのである。サント=ブーヴ批判という主題で作品をつらぬき、その主題の周囲に小説的要素をちりばめた作品という考え、そして更に一步進んで、小説部分と批評部分が有機的に結合した新たな作品という考えにプルーストは『コントロール・サント=ブーヴ』によって達したのだと思われるのである。

文学の排他的な諸ジャンルの呪縛をのがれたときに初めてプルーストに、それまでの諸計画を総合しうる創造的な地平が展けたと言えるのではないだろうか。

註

C.M.P. = *Correspondance de Marcel Proust, texte établi, présenté et annoté par Philip KOLB, Plon, 1970-*.

C.S.B. = *Contre Sainte-Beuve.*

- 1) *Contre Sainte-Beuve* suivi de *Nouveaux Mélanges*, préface de Bernard de FALLOIS, Gallimard, 1954.
- 2) *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et Articles*, édition établie par Pierre CLARAC avec la collaboration d'Yves SANDRE, Bibl. de la Pléiade, Gallimard. 1971.
- 3) この点に関しては両版の序文・解題、及び *Revue d'Histoire littéraire de la France* (septembre-décembre, 1971) 所収のフィリップ・コルブとピエール・クラックの論文を参照されたい。
- 4) 例えば, Maurice BARDECHE, *Marcel Proust romancier*, 2 vols., Les Sept

- Couleurs, 1971. を参照されたい。(特に第一巻第五・六章)
- 5) パリ国立図書館の旧整理番号で「ブルースト45」とよばれ、現行の整理番号(Nouvelles acquisitions françaises) では「16636」とよばれている草稿集。
 - 6) ファロワ版 *C.S.B.*, p. 13.
 - 7) N.a.fr. 16637 (*Le Carnet de 1908*, établi et présenté par Philip KOLB, Gallimard, 1976)
 - 8) カイエ1 (n.a.fr. 16641) ~カイエ62 (n.a. fr.16702)
 - 9) 何冊が *C.S.B.* に関係するかは研究者によって異っている。例えばクラックは、カイエ1 ~7・22・29の九冊(クラック版 *C.S.B.*, pp. 827 - 828), バルデッシュはカイエ1 ~7の七冊 (*Op. cit.*, t.I, p. 197), ブランはカイエ1 ~7・31・36・51の十冊(Bernard BRUN, *«L' Edition d'un brouillon et son interprétation: Le problème du Contre Sainte-Beuve»*, in *Essais de critique génétique*, Flammarion, 1979, p.153.), タディエは十冊 (Jean-Yves TADIE, *Proust*, Belfond, 1983, p. 139) 等々。
 - 10) ブルーストがサント=ブーヴ批判の視点をすでに1905年には持っていたことは、当時書かれた読書論(『読書の日々』, 後にラスキンの『胡麻と百合』の翻訳序文として使用された。)から窺い知ることができるが、1905年当時の発言は、1908年の発言とは全く文脈を異にしている。
 - 11) *C.M.P.*, t. VIII, p. 46. なお同年1月初旬のオーギュスト・マルギレール宛書簡(*C.M.P.*, t. VIII, p. 25)においては、「仕事」の準備をしつつあったことが漠然と知られるが、ブルーストが明らかに「仕事」の意欲を示した最初の発言は、ストロース夫人宛の2月2日付書簡においてであると思われる。
 - 12) *C.M.P.*, t. VIII, p. 99.
 - 13) 2月から3月にかけて、バルザック、ファゲ、ミシュレ、ゴンクール兄弟、フローベール、サント=ブーヴ、ルナンの七篇のバスティッシュを『フィガロ』に発表している。
 - 14) Cf. *C.M.P.*, t. VIII, p. 46.
 - 15) *C.M.P.*, t. VIII, pp. 112-113.
 - 16) *Le Carnet de 1908*, p. 56. この要約にはすでに「ヴィルボン」と「メゼグリーズ」の二つの方向(『失われた時を求めて』におけるスワン家とゲルマント家の二方向の原型), 後にスワンとなる人物との夕食・主人公の就寝の場面・親の譲歩(い

ずれも『スワン家のほうへ』のエピソードの原型)、二つの方向に関する結論(『見出された時』の最終場面に相当する)などが見られる。詳しくは同書に付されたコルプの序文を参照されたい。

- 17) *C.M.P.*, t. VIII, p. 123.
- 18) 従来ブルーストが1908年6月にはすでに小説を確実に書き始めていた証拠として引用されてきた「余り苦しくない日には、小説相手に進展のないまま、もがいています」という文言のあるロベール・ド・モンテスキュー宛書簡(例えば BARDECHE, *op. cit.*, t. I, p. 165, Henri BONNET, *Marcel Proust de 1907 à 1914*, 2 vols., Nizet, 1971, t. I, p. 64.)は、それより一年以上後の1909年11月とのフィリップ・コルプの年代決定(Cf. *C.M.P.*, t. IX, p. 214)に従って、本論では取り上げない。
- 19) *Le Carnet de 1908*, p. 61. この部分の記述は9月から11月にかけてのものと推定されている。
- 20) *C.M.P.*, t. VIII, p. 320.
- 21) *Ibid.*, t. VIII, p. 324.
- 22) *Ibid.*, t. VIII, pp. 324 et 327.
- 23) *Ibid.*, t. VIII, p. 331.
- 24) *Ibid.*, t. IX, pp. 20 – 21.
- 25) *Ibid.*, t. IX, pp. 61 – 62.
- 26) *Ibid.*, t. IX, p. 102.
- 27) *Ibid.*, t. IX, p. 116.
- 28) *Ibid.*, t. IX, p. 129.
- 29) *Ibid.*, t. IX, p. 146.
- 30) この小説草稿の要約が『1908年の手帳』に記されているのだが(註の16を参照)ファロワの調査時には75枚と確認された草稿自体は現在、行方不明となっている。
- 31) *C.M.P.*, t. IX, p. 151.
- 32) *Ibid.*, t. IX, pp. 155 – 156.
- 33) *Ibid.*, t. IX, p. 156.
- 34) *Ibid.*, t. IX, p. 161.
- 35) *Ibid.*, t. IX, p. 163.
- 36) *Ibid.*, t. IX, p. 180.
- 37) *Ibid.*, t. IX, p. 180.

38) *Ibid.*, t. IX, p.218.

39) *Ibid.*, t. IX, note 14 de la lettre 115, et notes 6 & 8 de la lettre 116.

40) *Ibid.*, t. IX, p. 192.